

まちづくりにおける場の意味と意義に関する研究

久 隆浩¹

¹正会員 近畿大学教授 総合社会学部環境・まちづくり系専攻(〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1)

E-mail: hisa@socio.kindai.ac.jp

本論文では、まちづくりにおける「場」の意味や意義について分析を行う。ネットワーク社会が進展するなか、従来の階層組織型の活動ではなく、ネットワーク型の活動が求められている。そこで必要なのが「場」である。ネットワークは呼びかけから生まれるものであり、呼びかけのための場が必要である。情報交換から課題やビジョンが共有され、活動グループが形成されることでネットワーク活動が動き出す。こうした「ビジョン共有」や「オブジェクト指向」といったネットワーク活動の特徴を生み出すのが「場」の役割である。また、「議論」を中心に行われていたまちづくりの会合であるが、場では「対話」が重要であり、こうした話し合いの質転換にも「場」は重要である。

Key Words: community design, collaboration, emergence, platform, networking, dialogue

1. はじめに

本研究は、まちづくりにおける「場」の意味と意義について分析、考察を行うものである。筆者は、関西の各地で「まちづくり井戸端会議」を開催している。2001年10月に、八尾市東山本小学校区の「まちづくりラウンドテーブル」と吹田市北千里地域の「北千里地域交流研究会」でスタートしたこの試みは、来るべきネットワーク社会に不可欠のしかけである。当初は試行錯誤的に始めたが、15年経って改めてその意義を考えてみると、対話の場から創発を生み出すしくみとして機能している。そこで、本研究では、「まちづくり井戸端会議」を柱として、まちづくりにおける「場」の意味と意義について考察を行うことにする。

「まちづくり井戸端会議」は、小学校区を基本単位として、月に1回程度の定例会を催し、情報交換を図るものである。ここは自発的な参加を重視し、参加できる人が参加できるときに参加するオープンな場所である。また、話題もみんなで持ち寄ることを原則としている。さらに従来の会議が合意形成を目的としていたのに対し、まちづくり井戸端会議は合意形成をめざさず意見交換にとどめている。従来型の会議運営を想定してしまうと、こうした緩やかな運営が理解できないが、ここからいろいろな取組やネットワークが生まれている。

このように本論文では、まちづくりにおける「場」をネットワーク社会に不可欠なしくみとして捉える。「場」に集まった人々が「対話」を行い、そこから「創発」や「共創」が生まれる。これがネットワーク型の活動展開には重要であることをあきらかにしたい。

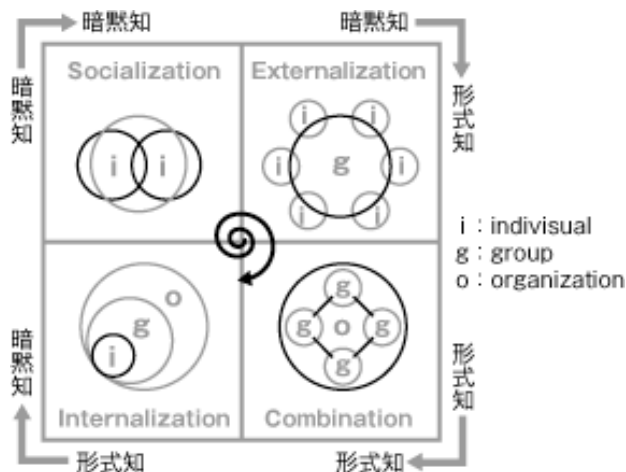


図-1 知識創造のSECIモデル

(出典) 野中郁次郎、紺野 登『知識経営のすすめ』

2. 場と共創

生命学者である清水博らは『場と共創』¹⁾を著し、共創において「場」の重要性を指摘している。「場」の存在と複数主体による「共創」の行為の関係について清水はつぎのように述べている。「多様な人々が集まって、共創することができるためには、それぞれの間の差異をこえて、活動全体を包摂することができる大きい場所—共創の舞台—が創出されることが必要である。逆に言えば、このような場所を創出する創造力があるから、多様な考えの人々が一緒に働くことができるのである。」

また、組織経営論分野で同様の発想を展開しているのが野中郁次郎²⁾である。ナレッジマネジメント(知識経営)では、経験や勘に基づいており言葉などで表現が難しい「暗黙知」が重要であり、暗黙知を共有する「場」の

存在が鍵であるとするのが、野中の「場の理論」である。

野中は知識創造のモデルとして「SECI モデル」を提唱した。個人が持つ「暗黙知」を「形式知」化することで組織として共有し、それを再び個人の「暗黙知」とするプロセスによって、知識創造が生まれるとするモデルである。経験を共有することによって「暗黙知」を創造する<共同化>Socialization、共有した暗黙知を形のある「形式知」としていく<表出化>Externalization、形式知同士を組み合わせると一つの知識体系を作り出す<結合化>Combination、そしてその知識を「暗黙知」として自らのものにしていく<内面化>Internalization、この 4 つのプロセスを循環させ、スパイラルアップしていくことが知識創造である。

また、共同化が起こる場が<創発場>、表出化が起こる場が<対話場>、結合化が起こる場が<システム場>、内面化が起こる場が<実践場>としている。

野中の共同研究者である伊丹敬之は、『場の論理とマネジメント』³⁾において、場における情報の相互作用によって「共通理解」と「心理的共振」が生ずることが重要だと述べている。伊丹は「場とは、人々がそこに参加し、意識・無意識のうちに相互に観察し、コミュニケーションを行い、相互に理解し、相互に働きかけ合い、相互に心理的刺激をする、その状況の枠組みのことである」としている。また「人々の中のヨコの情報の相互作用と心理的相互作用が自然にかつ密度濃く起きる結果、自己組織的に共通理解や情報蓄積、そして心理的エネルギーが生まれてくる」と述べている。ここで言う「心理的共振」とは、元気ががんばりが伝わっていくということであるが、場における情報交換を通じて「共通理解」と「心理的共振」が生まれる。

3. 対話と議論

先ほどの SECI モデルでも<対話場>があったが、共創やネットワーク構築には「対話」が重要である。従来の会議では「議論」を行ってきたが、対話と議論は目的や目標が異なる。中原淳、長岡健は『ダイアログ 対話する組織』⁴⁾のなかで、次のように説明している。

「いくつかの選択肢があったうちのどれが正しいか、論を戦わせ、どちらかを捨てて、どちらかをとる」ということが「議論の」典型的なかたちであり、それを効率化したものが「いい議論」ということです。「対話」というのは、それとはまったく異なるプロセスです。勝ち負けを決めるディベートでもなければ、互いに最大の利益を追求する取引でもない。むしろ、前提となっている選択肢の可能性をもう一度探るとか、評価の基準そのものを再吟味するといった方向に話し合いを進めていきま

すのではないので、「対話」が「議論」に置き換え可能というわけではなく、両社は補完関係にあります。」

まちづくりの場で行なう情報交換は「対話」であり、対話を通じて創発が生まれる。物理学者の D.ボームは『ダイアログ』⁵⁾のなかで、対話のよさはお互いの価値観や意見の違いを認め合い、自由に意見交換ができる点にあると指摘している。そのために「対話はリーダーを置かず、何の議題も設けずに行うべきだ」とボームは言う。「対話においてはいかなる課題も設定せず、いかなる有益な事柄も達成しようとすべきではない、ということである。有益な目的やゴールを達成しようとするなり、何が有益なものかという想定が生まれる。そうした想定が対話を狭めてしまう」。まちづくり井戸端会議で議題を用意しないことと符合する意見である。

また、ボームは次のように述べている。「対話グループでは、どんなことに関しても決定を下したりはしない。この点が重要である。さもなければ、参加者が自由だと言えないだろう。人は何かをしると義務づけられていない、空白のスペースを持つ必要がある。または、いかなる結論も生まれず、何を言えとか言うなとか指示されないスペースだ。それはオープンで自由な、空のスペースだ。」「対話の目的は、物事の分析ではなく、議論に勝つことでも意見を交換することでもない。いわば、あなたの意見を目の前に掲げて、それを見ることなのである。-さまざまな人の意見に耳を傾け、それを掲げて、どんな意味なのかよく見ることだ。自分たちの意見の意味がすべてわかれば、完全な同意には達しなくても、共通の内容を分かち合うようになる。ある意見が、実際にはさほど重要でないともわかるかもしれない-どれもこれも想定なのである。そして、あらゆる意見を理解できれば、別の方向へもっと創造的に動けるかもしれない。意味の認識をただ分かち合うだけということも可能だ。こうしたすべての事柄から、予告もなしに真実が現れてくる-たとえ自分がそれを選んだわけでもなくとも。」まちづくり井戸端会議で合意形成を目的としない利点も、まさにこうした点にある。

従来の都市計画では、あまりにも合意形成を求めすぎたきらいがある。たしかに、土地利用など個人の財産権を制限する都市計画では合意形成は重要である。しかし、議論の場面では、厳格な合意形成を求めれば求めるほど話はこじれていく。意思決定の場では、自分の意見を通そうとするが、そのために相手の意見をつぶそうとしがちになる。それが雰囲気悪くする。一方、対話の場では、お互いが自由に意見交換をし相互理解が促進される。

4. ネットワーク型活動と階層組織型活動

市民活動や地域活動の動き方には、ネットワーク型活

表-1 階層組織型とネットワーク型の活動の違い

	階層組織型	ネットワーク型
構成員の関係性	上下関係	水平関係
意思決定	上層部で決定	みんなで考える (意思決定がないときも)
活動形態	指示・命令で一丸となって動く	自発的に、できること/やりたいことを行う
	やらねばならないことを使命感で	やりたいことを楽しく

動と階層組織型活動がある。それぞれの特徴は表 1 のように整理することができる。階層組織は、その名の通り構成員の間に上下関係が存在する。そして、意思決定は上層部でなされ、その決定が指示・命令という形で下に下ろされ、一丸となって動くのが階層組織型の動き方である。一方、ネットワークでは構成員に上下がなく、水平につながっている。意思決定は構成員同士が話し合い、参加型で決定していく。また、組織全体で意思決定せず、気の合う有志で動くこともある。こうした動き方をするネットワークでは、構成員ができること、やりたいことを自発的に行い、それらがつながって活動が展開される。

自治会活動をはじめとした地域活動の多くは、階層組織型活動として展開されてきた。地域住民が自治会活動から離れていくのは、役員を中心に意志決定を行い、動員をかけて動かすやり方が時代に合わなくなっているからではないだろうか。とくに若者にとっては馴染めないものとなっていると思われる。一方で、NPO をはじめとするテーマ型活動に参加する人が多くなっている。自らの興味・関心に合わせて楽しく活動できる、そんな活動に魅力を感じ、参加する人が増加しているといえる。

このように、階層組織型活動とネットワーク型活動では、活動の担い方が根本的に異なっている。従来の活動の多くは階層組織型活動であったが、今後はネットワーク型活動をいかに増やしていけるかが重要といえる。そのためにも「場」が必要である。ネットワークは「つながり」であるが、つながりは「呼びかけ」から生まれてくる。「こんなことしませんか」という呼びかけに共感した人々が集まり、活動が生まれていく。これを「この指とまれ」方式と呼べば分かりやすいだろうか。

5. ネットワーク組織とオブジェクト指向

高木晴夫は、ネットワーク組織における組織行動の特徴として、「個人の自律性」「協働活動」「価値観・ビジョンの共有」「オブジェクト指向」の 4 つを挙げている⁶⁾。

ネットワーク組織では、マルチメディアの活用によって組織構成員ひとりひとりの「情報格差をなくして各自が仕事の達成に向けて自ら工夫し熱意を集中できるようになる。そして個人個人の持つ本来の能力発揮を促し、情報による上下関係や依存関係のない主体的で自律した個人の集まる組織として機能できるようになる。」「同時に、知識データベースを共有することで(組織構成員は)お互いに自由に援助しあいながら協働活動をする基盤が持てる」「しかも、そうすることは、協働活動は重要だという価値観と活動の方向性をビジョンとして共有することにもつながる。」そして、仕事のやり方として「オブジェクト指向」をもたらす。オブジェクト(object)とは対象・目的という意味であるが、マルチメディア、とくにそのなかでもグループウェアの活用によって目的が共有され、目的指向性の高い組織活動が可能になる。それにくらべ、従来の「ピラミッド型の組織活動の場合、仕事の指向性は<分業>から来た。だから緊急な課題や案件を解決しようとしても生じるのはタテ割り組織による業務分担の硬直さであり、それが本来なされねばならないことを細切れにするのである。」一方、ネットワーク組織では「ひとかたまりの課題のまま横に通す<オブジェクト指向>の活動を可能にする。」

階層組織が分業にもとづく組織で成り立っていたのに対し、ネットワーク組織は共有したオブジェクトに人々

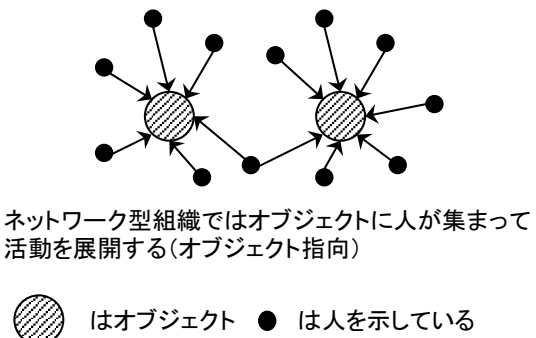
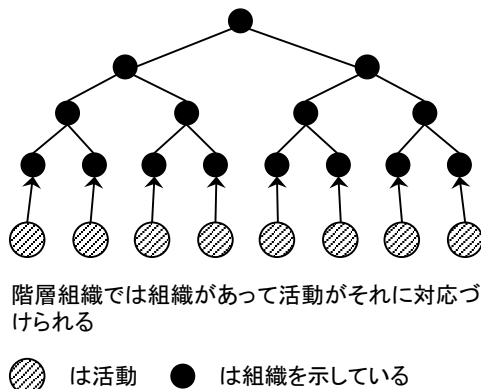


図-2 階層組織とネットワーク組織の活動展開の違い

が集まり、実行グループが生まれ活動が展開される。対話の場との関係で言えば、場に集まった人々が対話を繰り返し、価値観やビジョンが共有され、オブジェクト指向で活動が展開される。

6. 自他非分離の「場」

自然科学の分野で「場」の理論の基礎を構築したのは 19 世紀半ばのファラデーやマックスウェルらによる電磁気の研究である。粒子が場（電磁場）を生み、場が粒子に力を与えるという粒子と場の相互作用を考えた。この考えを社会科学に援用したのが、20 世紀半ばのレヴィンの「場の理論」である。人間は個人の特性によるだけでなく、その人が置かれた「場」に影響を受けて行動するものだという説である。人間の行動(B)を、個人の特性(P)とその人を取り巻く環境(E)との関数 $B=f(P, E)$ で表した。

こうした場と人間、環境とシステムの関係について、清水博とともに「場と共創」の研究を行っている三宅美博は、従来のシステム論がシステムと環境を分離する「境界」を前提としていたのに対し、「場」は環境とシステムを分離しないで認知するものであると指摘している。⁷⁾三宅は言う。「共創としてのシステム設計とは、システムの非完結性に注目し、それを包摂する人間のコミュニケーションの奇蹟を受け入れる姿勢にある。これはシステム設計における自己否定を介して「場」への贈与を行うことであり、その「場」を受け入れることによって自他が出会うことである。そして、その延長上に自他のコミュニケーション可能性、つまり「コミュニケーション可能性(communicability)」の拡大も期待される。これが相互乗り入れの場における集団的気づきとしての共創的な設計の意義である。」

彼は、システムと環境を分離してシステムを考えてきた従来のシステムズアプローチではなく、近年はそれらを分離しないソフトシステムズアプローチが台頭してきたことを指摘している。「ソフトシステムズアプローチは、レヴィン(K. Lewin)に端を発する「質的研究(qualitative research)」のひとつであるが、観察者が問題状況の内部に入り現場の人々と協働して、状況そのものを変えていこうとする実践的活動と捉えることも可能である。関連する研究としてはグラウンディッド セオリー(grounded theory)やエスノメソドロジー(ethnomethodology)なども知られている。これらは近代科学が採用した自他分離の研究方法を批判しつつも、結果的には従来の枠組みの中に回帰しつつあるように思われる。その理由は、システム

表-2 場と組織

	場	組織
話し合い手法	対話	議論
目的	創発・共創	合意形成
活動展開	ネットワーク型活動	階層組織型活動
具体例	まちづくり井戸端会議	街づくり協議会

の認知、つまりシステムの境界生成の問題を設計者の認知的領域において捉えている点にあり、認知を包摂する身体とそれを介する開かれた認知の生成プロセスが十分には考慮されていないことにある。」こうした「場」の特徴を身体感覚で総合的に分析する手法論を考えていくこともこれからの課題である。

7. まとめ

従来、都市計画では合意形成を目的とする「議論」を重要視してきた。そのため、研究でも合意形成の手続きや手法についての研究が多かった。しかし、ネットワーク社会では、合意形成に基づかないネットワーク活動もますます重要になってくる。たしかに、土地利用など私権を制限する都市計画では、厳格な合意形成が求められる。こうした場面ではこれからも合意形成に向けた議論が必要であろう。しかし、リノベーションまちづくりのように小さな動きが積み重なってまちを変化させていくネットワーク型のまちづくりを活性化するためにも、「場」における「対話」が重要である。これからのまちづくりでは、表 2 で示すように、「場」と「組織」を使い分けていくことが求められる。

参考文献

- 1) 清水博：『場と共創』NTT出版、2000
- 2) Ikujiro Nonaka, Hirotaka Takeuchi: The Knowledge-Creating Company: How Japanese Companies Create the Dynamics of Innovation, Oxford University Press, 1995
- 3) 伊丹敬之：『場のマネジメント』NTT出版、1999
- 4) 中原淳、長岡健：『ダイアログ 対話する組織』ダイヤモンド社、2009
- 5) David Bohm: On Dialogue, Routledge, 1996
- 6) 高木晴夫：「ピラミッド組織からネットワーク組織へ」『マルチメディア時代の人間と社会』日科技連、1995
- 7) 三宅美博：「システム設計における共創という姿勢 自他分離の「境界」から自他非分離の「場」へ」『計測と制御』vol.51, 2012

A STUDY ON MEANING AND SIGNIFICANCE OF “BA” IN COMMUNITY PLANNING

Takahiro HISA